



## 第4章

# 30年後のけいはんな学研都市の るべき姿、ありたい姿

「先端〇〇都市」。私たちはけいはんな学研都市を、世界からどのように呼ばれる街にしたいのか。世界中で、科学技術都市、文教都市、産業都市など様々な街づくりが志向され、構築・運営されている。私たちは、必ずしも先例に従うのでなく、この街のるべき姿、ありたい姿を、30年先も変わらぬ基本概念として設定し、この地域固有の視点を大切にしてその答えを見つけ出していきたい。研究・開発の力だけではなく、人という観点からみた住みたい街、訪れたい街とはどのようなものか、文化が街にもたらす重厚さ、センス、普遍性とはどのようなものかを見極めていきたい。

### ①持続可能な街づくりを目指して

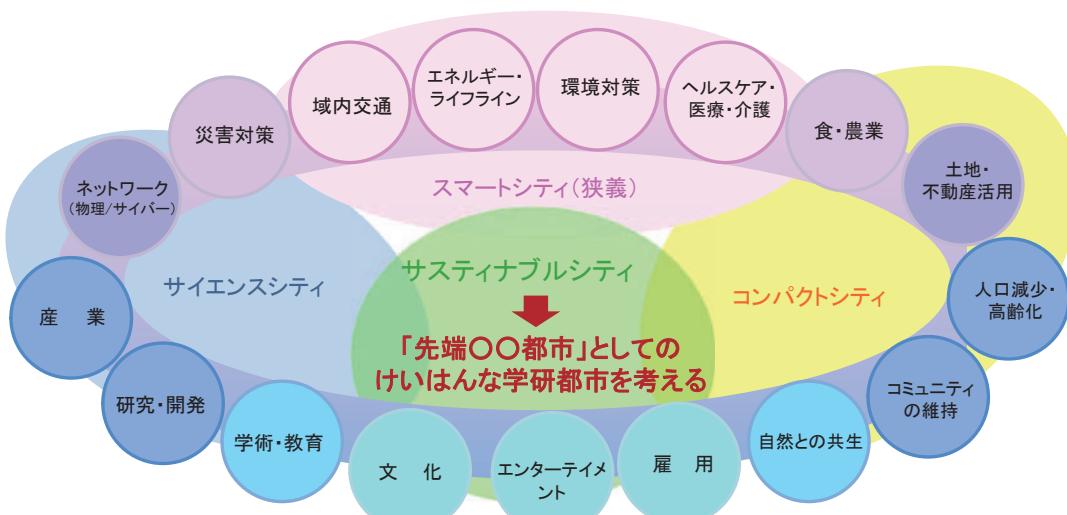
30年先を目指す持続可能な街づくりに際しては、現状の課題への個別的な対応や、個別要素ごとの対応施策では十分ではない。現在、新たな街づくりには「スマートシティ」、「サイエンスシティ」、「コンパクトシティ」などいくつかの呼称があるが、その定義やカバーする範囲は様々である。一般的には、狭義の「スマートシティ」では域内交通、エネルギー、ライフライン、環境対策、ヘルスケア、医療、介護などを主に取り扱っている。「コンパクトシティ」では、食、農業、土地、不動産活用、人口減少、高齢化、コミュニティの維持、自然との共生、雇用を主たる対象としている。「サイエンスシティ」では、文字通り科学を核にしたネットワーク、研究、開発、学術、教育、文化から産業に至るラインに主眼を置いている。けいはんな学研都市の30年先のコンセプトを構築するにあたり、その検討範囲をどこまで拡大すべきかについても、検討し当初にて整合しておくべきポイントとなる。ちなみに、未来に向けてあらゆる角度から持続可能性を確保するために、広範な検討対象をもつものを、「サステイナブルシティ」もしくは「広義のスマートシティ」と呼ぶケースが多く、総合的な施策検討が行われているケースもある。

サステイナブル<sup>28</sup>な発展とは、「経済、社会、そして文化的な側面をもち合わせ、現在における様々な人間相互の公平性や世代相互の公平性を含む概念」であり、地域再生とは、「これから始まる時代における人間の生活の「場」の創造にほかならない」としたとき、けいはんな学研都市が「サステイナブルシティ」として、そして「先端〇〇都市」として何らかの特徴づけがなされた都市に進化していく上で、必須の要素をどこに置くのか。近視眼的に経済成長や人口問題の解決などを追求しても、他と変わり映えのない取り組みとなってしまう。ヨーロッパのスローガンである「ゆっくり進もうおちついで(slow up and calm down)」をけいはんな学研都市に置き換えてみると、これまでのように「今の課題を科学技術に依存して解決を図り成長を目指す」のではなく、街づくりの様々な要素を包括的に捉え、けいはんな学研都市ならではという視点を持ち、持続的で幸福な都市のあり方をしっかりと見据え、着実に進めていく必要がある。

### ②文化的資産による地の利の活用

文化的資産とは何かという視点で地域を見ると、平城・恭

図9：持続可能な街づくりを目指したトータルなアプローチのあり方



28: 「サステイナブル」とは有限な地球の環境容量や資源を保全し持続可能な方向を志向することであり、ここでは持続可能な都市を指す

仁・難波・長岡・平安と、かつての都があった場所、酒(伏見、奈良)や茶(宇治)のようなグローバルに評価される産業基盤が存在、神社仏閣と各宗派が密集、花街や能楽など日本の伝統芸能の伝承、商売や産学連携の発祥の地、教育機関の集積など、けいはんな学研都市は様々な文化的資産の交点であることが分かる。このような文化的資産と、最先端の知を活用した「30年後のけいはんな学研都市の具体的なイメージ」を創り上げたい。特に、物質的豊かさを実現した社会においては内面的豊かさが志向され、文化への人々の関心、ひいては文化の価値が高まることが期待される。こうした時代の流れを捉え、従来、経済活動との結びつきが希薄だった文化が経済活動と結びついた「文化経済」をけいはんな学研都市で創り上げることを目指す。文化的資産に基づかない取り組みは、「けいはんな学研都市でなくとも実現可能」ということでもある。企業誘致にしても、けいはんな学研都市に固有の文化的資産を活用することのできる企業、つまりけいはんな学研都市に存在する必然性のある企業を誘致・育成することができれば、それは「オンリーワン」であり、他の都市との絶対的な差別化要素となる。

また、文化的資産を活用するという視点において、有形の名勝であるとか史跡というものはもちろんあるが、それ以外に無形文化も含めて日本の様々な発明がある。例えばインスタントラーメンとかウォシュレットなど、広い意味で日本文化の産物といえるものがある。これらは日本人の行動様式や習慣などを背景にしており、清潔好きだと、手軽に何とかしたい、時刻を守りたい、そういう日本人の特性が産み出した発明物とができる。

文化的資産による地の利の活用を考えるとき、名所、旧跡、あるいは伝統工芸といったものだけではなく、そのようなものの背景にある思想性にも着目し、和魂洋才ではなく、和魂和才で様々なものを生み出していくということも推進していきたい。

### ③けいはんな学研都市のコンセプト基本概念

このように、街を形成する様々な要素が文化的背景をもって街の中にバランスよく内包され、かつ相互に作用しながら循環することが重要である。「ベッドタウン」や「工業団地」、「学園都市」のように一部の要素だけが突出している状態では持続性がない。さらには、街を形成するそれぞれの構成要素のクオリティが高いことも必要であり、かつ一過性のものでないこと。そのためには、それぞれがけいはんな学研都市固有の文化・芸術・学術といったものを背景とした重厚さとセンス、そして普遍性をまとめたものでなければならない。この街ならではの特徴、つまり広い意味での地の利として、地理的位置や自然環境のみならず、立地機関・企業・住民・伝統・文化などをトータルに捉えて、むしろ意思をもってつくりこんでいくようなものを含めて、いかに活用することができるかということを考えるべきである。

同時に、地球のキャパシティの限界、資本主義の限界などに起因する社会課題の拡大を考えたとき、これまでのような進歩主義的な科学技術に依存した解決策だけでは不十分であり、人文社会系を含む幅広い知の結集・融合が必須となる。そのための学術、文化、教育等における基盤構築や住民のリテラシー向上の取り組みも併せて考慮すべきである。また、30年後においても持続性をもって繁栄している街づくりを考えるにあ

図10：けいはんな学研都市の都市基本コンセプト



たっては、「Innovation～生み出す、変えていく」という視点に加え、「Incubation～育てる、育む」といった視点と施策も重要な要素である。

もう一つの観点として重要なことは、けいはんな学研都市が持つ幅広い知を活用することで、研究・開発、産業、教育などの「プロセス・イノベーション<sup>29</sup>」を成し遂げることである。ICTの進歩、AIの更なる進化は、「機械的」と表現されるような単純な分野だけでなく、「想像力」や「知力」を駆使する、これまで機械にできなかった分野においても、人間を支援し、ある部分については代替することができるようになってくる。その変化の初期段階として、「Science2.0(研究・開発)」、「Industry4.0(産業)」、「Education3.0(教育)」といったキーワードで個別に語られ、様々な検討が始まられているが、それらはそれぞれ異なる活動であっても、「プロセスを革新する」という視点で見ればすべて共通であり、共通の知を活用し、構築したプラットフォーム<sup>30</sup>を共用できるはずである。けいはんな学研都市は、社会課題の解決に向けた、いわゆる「ソーシャル・イノベーション」だけでなく、この街における種々の活動のプロセスを世界最高レベルのものとし、これまでにないスピード感と達成レベルを目指した「プロセス・イノベーション」を成し遂げ、それを世界に展開していく存在となりたい。

このように、街づくりの様々な要素をトータルに捉えるという基本概念をベースに、持続可能で幸福な街を目指す。基幹産業が存在し、住民が地元で雇用され、域内外の交通の利便性が向上し、立地機関間やクラスター間の連携が進み、科学技術と文化が融合し、一流の企業・研究機関・教育機関が立地し、一流の研究者が暮らしている、社会課題解決で一歩先をい

く街。長期に亘る持続性のためには、文化学術研究都市として、「探究する」、「働く」、「学ぶ」、「住まう」といったそれぞれの要素が高いクオリティで実現される街。その実現には、けいはんな学研都市に集積しているナレッジを中心にして、産学官民が集い、協力し合いながら様々なジャンルのテーマ、それは社会課題でもあるわけであるが、それらに対して取り組んでいくために、サイエンスシティとしての研究開発基盤を中心に、スマートシティとしての都市基盤、独立性と優位性をもった文化的基盤の3つのベースを形成していくこととなる。けいはんな学研都市として、10年先も30年先も変わらないコンセプトの基本概念は、新たな知の創造とこれまでのストックを活かして、一部の機能だけに依存しない包括的で持続可能な街づくりを目指すものである。